

かんきつかいよう病の越冬病斑と春季防除

かんきつのかいよう病は越冬病斑が新葉の伝染源となる。
越冬病斑からは春季の気温の上昇に伴い菌が流出することから、発芽前から防除を徹底することが重要。

1 越冬病斑

- ・6月下旬の春葉の発病と関係が強いのは、前年の夏秋葉での発病
- ・その他の重要な春季伝染源は「春先感染病斑」と「潜伏越冬病斑」
→春先感染病斑：春に傷口から感染

→**潜伏越冬病斑：昨秋の気温の低い時期に感染して未発病**

○潜伏越冬病斑（感染しても未発病）となる感染時期の調査

- ・供試樹：宮内伊予柑(18年生)
- ・穿刺接種：2021年9月22日、10月7日、10月22日、11月6日の4回
各樹の夏秋梢4カ所の5葉（4カ所/葉）
- ・発病箇所調査：2021年11月27日と2022年3月16日の2回

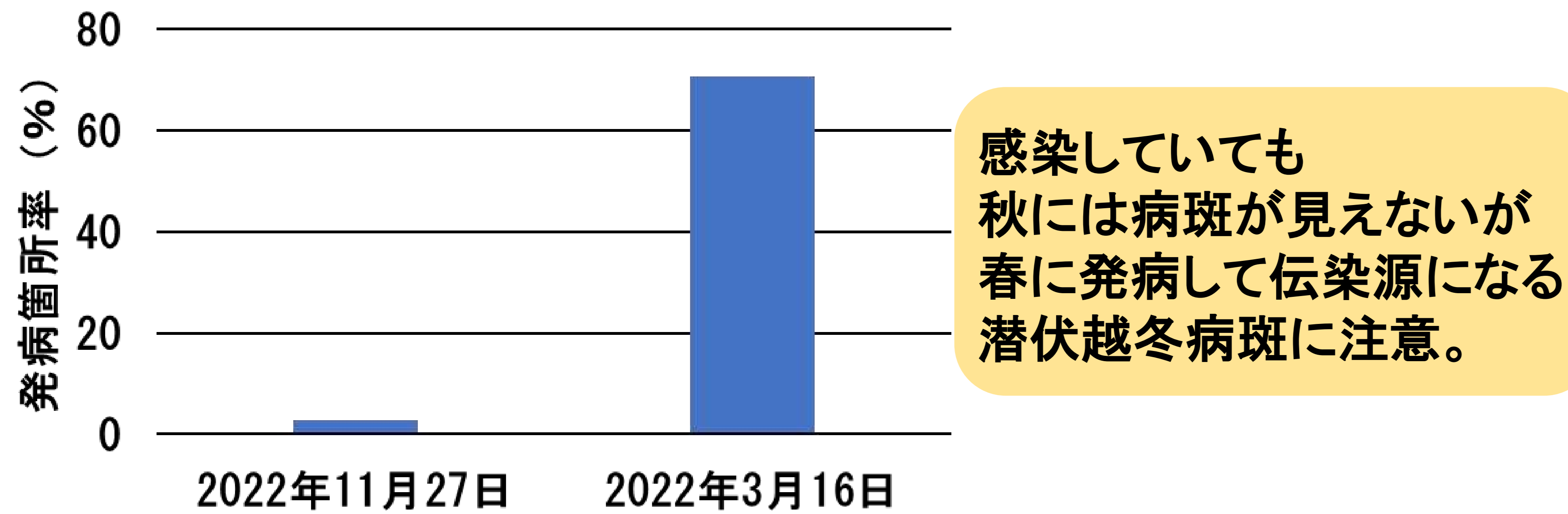


図1 11月6日接種葉の発病率 ※9月22日、10月7日、22日接種葉の11月27日の発病箇所率は94~100%



越冬病斑が多いと菌量が多くなり、春葉の感染が増加するため病斑除去と薬剤散布を徹底する。

2 春葉での防除剤の検討

- ・供試樹：愛媛果試第28号（3年生）
- ・穿刺接種：2022年3月24日に各樹10葉（2カ所/葉）
- ・調査方法：6月16日に春葉200葉の発病状況を5段階に分け、発病度算出

指数0：病斑なし、指数1：1~3個、指数3：4~10個、指数5：11~20個、指数7：21個以上

$$\text{発病度} = \frac{\sum (\text{発病指数} \times \text{程度別発病葉数})}{(7 \times \text{調査葉数})} \times 100$$

$$\text{防除価} = (100 - (\text{処理区の発病} / \text{無処理区の発病})) \times 100$$

試験区	希釈濃度			備考
	3月25日	4月27日	5月23日	
ICボルドー66D	40倍	80倍	80倍	4月27日アビオンE1,000倍加用
コサイド3000	1,000倍	2,000倍	2,000倍	全散布アプロン200倍加用
ムッシュボルドーDF	500倍	1,000倍	1,000倍	全散布アプロン200倍加用
クプロシールド	1,000倍	2,000倍	2,000倍	全散布アプロン200倍加用
クミガードSC	500倍	1,000倍	1,000倍	全散布アプロン200倍加用

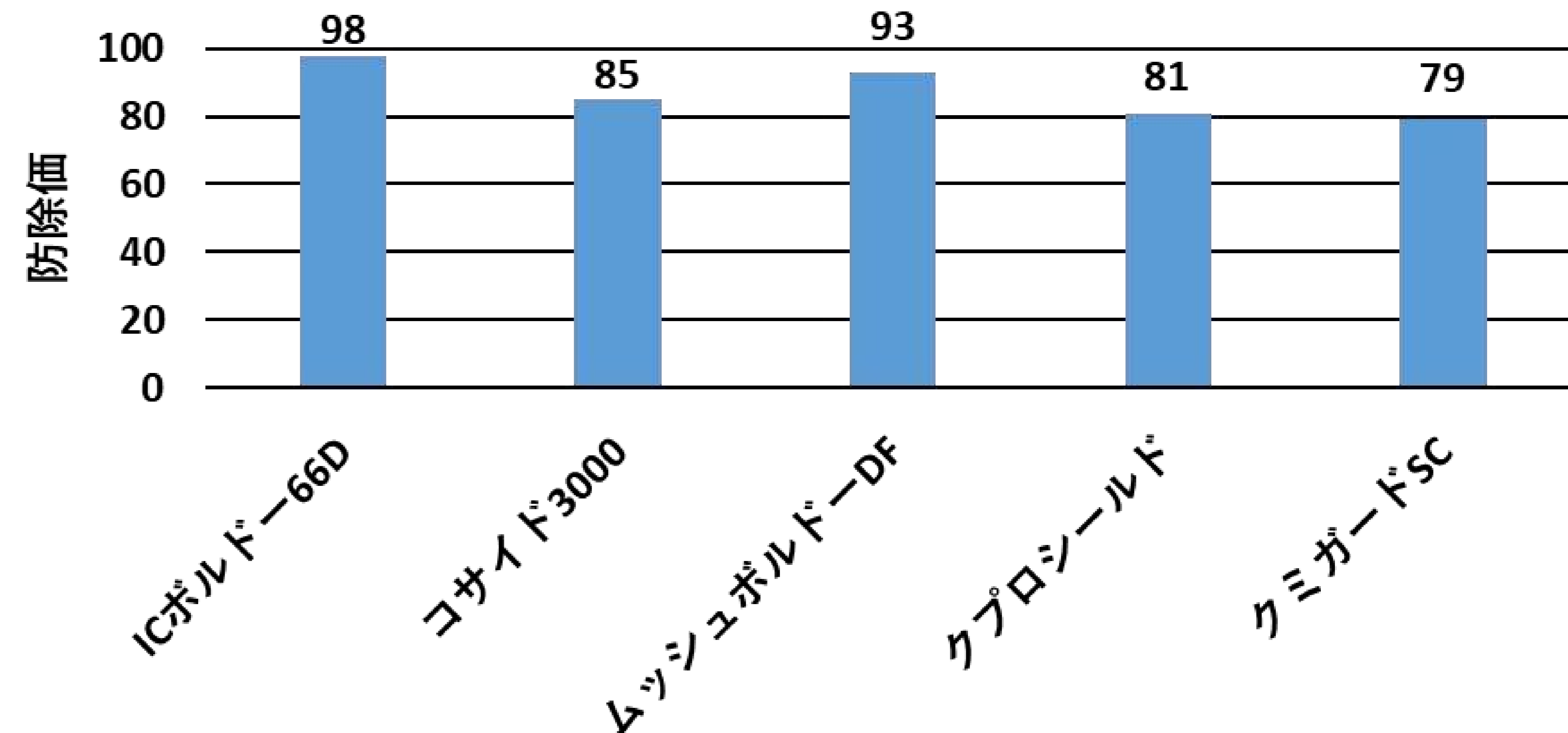


図2 各種銅剤の春葉での防除効果

※無処理：中発生（発病葉率31.5%、発病度 9.1）

防除価はICボルドー66D、次いでムッシュボルドーDFが高かった。